

超人気FP!

ABC ネットニュース

深野康彦の 先取り経済NEWS!!

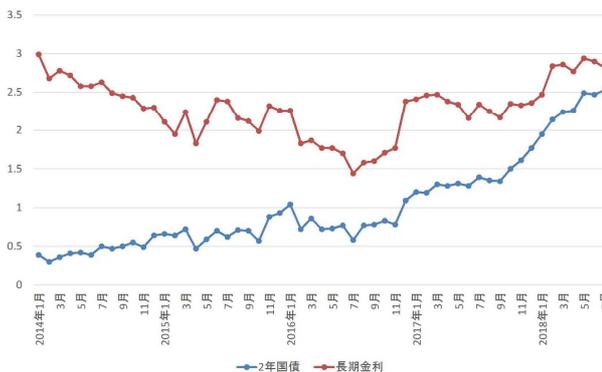
編集・発行 株式会社 アサヒ・ビジネスセンター 2018年8月8日

今月のトピックス 「米国経済の好調は持続するのか？」

米国景気は独り勝ちの様相を呈しています。7月下旬に米国商務省より公表された2018年第2四半期(4~6月期)の国内総生産(GDP)の速報値は、前期比年率で実質4.1%増と約4年振りの高成長となりました。また、同月中旬にIMF(国際通貨基金)が公表した世界経済見通しでも、米国の成長率は横ばい(2.9%)でしたが、日本(1.0%)、ユーロ圏(2.2%)は共に0.2%下方修正されたのです。高成長の背景は、トランプ政権が実現させた大幅減税の効果、米中の貿易摩擦を懸念して、大豆などの一部商品が駆け込みで輸出を急増させたことにあります。その詳細は専門家に任せるとして、問題は高成長により米国の利上げにドライブがかかるか否か。正確には利上げの回数や速度が増えたとしても、それに応じて長期金利も同様に上昇して行くのかどうかは鍵なのです。

図は米国の2年国債(短期金利)の金利と10年国債(長期金利)の金利の推移です。2014年から動きをトレースしたのですが、2014年1月には短期金利と長期金利の間には、2.5%もの差があったにもかかわらず、2018年7月にはその差が0.3%程度に縮まっているのです。なぜ縮まったのかと言われれば、短期金利は足下の景気や政策金利の動きを反映して動き、長期金利は将来の景気や政策金利を見通して動くからです。

米国、短期金利と長期金利の推移



※出所:ブルームバーグ等が公表している数字を基に作成、単位=%
短期金利は2年物国債、長期金利は10年物国債で毎月第1金曜日の終値(利回り)

足下、景気は絶好調ですが、米国のFRB(連邦準備制度)は、利上げは2018年あと2回、

2019年2回または3回(内1回は2020年という見方もある)で打ち止めになる可能性が出ているからです。打ち止めの可能性=景気はピークを付け後退に転ずると読み替える(将来を見通す)ことができるため、長期金利の上昇が鈍化してしまったのです。長期金利の上昇は鈍化していますが、短期金利は政策金利が引き上げられれば、上昇が続くと予想されるため、結果として短期金利と長期金利の差が縮小しているのです。過去の経験則では、短期金利が長期金利を上回ると概ね1年前後以内に景気は後退(リセッション)すると言われていています。このまま米国景気の好調が続き、政策金利の引き上げが予定通り行われれば、年内にも短期金利が長期金利を上回る可能性が出てきたのです。なぜなら、政策金利は1度につき、0.25%の整数倍で変動するため、長期金利の上昇鈍化が継続していれば、足下の0.3%程度の差は2回の利上げで埋めてしまうことになるからです。米国景気は絶好調とはいえ、専門家の間では長短金利の逆転があるのか否かに注目が高まっているのです。